

平和を伝える

南大東村立南大東小学校六年 大城 瀬依

毎年、六月になると学校で「平和集会」が行われます。七十年以上前に起こった沖縄戦について、体験者の話を聞いたり、映像を見たりして全校児童で当時の様子を学びます。

「今の平和な世の中に戦争なんて起こるのかな？」

平和集会の時期が近づくと、いつもこの疑問がうかびます。「戦争はダメ」とか、「戦争はたくさん人の命をうばうもの」とか、戦争がいけないものであることや戦争のかなしさは理解しているつもりです。けれど、正直言えばわたしにとっての戦争は、どこか別の遠いところで起こっているものであって、自分とは関係のないもののように感じてしまうときもあるのです。

五年生の六月の初めごろ。学校でまた平和学習をする時期になりました。

「もし家族に戦争を体験された方がいて、戦争のころの話を聞けるのであれば、聞いてみてください。」

授業で平和学習をしたときに先生が言いました。わたしには戦争を体験したおじいちゃんがいるので、「おじいちゃんに戦争の話を聞いてみたら、どんなことを教えてくれるだろう。」と思い、帰っておじいちゃんのところへ行きました。

おじいちゃんに学校で沖縄戦の勉強をしたことを話し、沖縄戦のことについて聞いてみました。おじいちゃんは私の目をみて、ゆっくり語ってくれました。

戦争があつた年、わたしのおじいちゃんは小学三年生の九才でした。戦争が始まる前は私たちと同じように毎日学校に行つて勉強をしていたそうです。しかし、戦争が激しくなると学校に兵隊が住むようになり、学校で勉強ができなくなったそうです。

その話を聞いて、「兵隊さんは島民を守るために来てくれているのだから、仕方ないことなのかな。」と私は心の中で思いました。でも、おじいちゃんが続けて話したことを聞いて、私は大きくショックを受けました。

夜通し「かんぼう射撃」が続いて、だんだんと食べ物越来越少なりました。すると兵隊さんたちは、住民の食料をうばっていったといひます。おじいちゃんたちは食べる物がなくなり、何と池のこいやかたつむりを食べていたそうです。

戦争はさらにはげしくなつていったそうです。島民のみんなは防空ごうになる穴を探し、空爆をさけるためにかくれていたそうです。しかし、穴を見つけても兵隊さんが来て、「出て行け！」と言われて追い出されたそうです。危険から身を守るために、他の穴をさがし歩くという毎日を送っていたそうです。

私は話を聞いてむねが痛くなりました。学校の平和学習で学んできたことすべてを理解していたつもりになっていたけど、おじいちゃんの話を書いて、知らないことがたくさんあることに気づきました。何より、戦争が身近なものであつたことにしよげきを受けてむねが痛くなったのです。

私は学校で先生にその話をしました。すると、先生から平和集会でその話を伝えてほしいとお願ひされました。はじめはきんちようするといひ思いが強かつたけど、「平和の大切さを伝えていくのはおじいちゃんたちだけでなく、みんなにもできる」とだよ。」

という言葉聞いて私は勇気を出して話してみました。

平和集会のあと、クラスにもどるとみんなで感想を発表し合ひました。私と同じように「戦争が身近なものに感じた」といひ友達もいひました。

私たちはこれからは沖縄戦について学んでいく必要があると思ひます。なぜなら、それが平和な日常生活をつないでいく行動だからです。また、おじいちゃんやおばあちゃんたちだけが平和の大切さを伝えていくのではなく、私たちも学んだことをどんどん広めていくことも大切なのではないでしょうか。

これからも沖縄に生まれたひとりとして、地上戦が起こつた地に生まれたひとりとして、私も責任をもつて平和の大切さを伝えていきたいです。

「おじいちゃんは孫やひ孫に囲まれていひ今の生活がとても幸せだよ。今の幸せがずっと続くといいな。」

おじいちゃんこの言葉が私をそう思わせてくれたきっかけになりました。